

興福寺北円堂南門・回廊の調査(平城第483 次)

興福寺では、1998年に策定された「興福寺境内整備基本構想」に基づき、寺観の復原・整備が進められています。この整備事業にともない、都城発掘調査部では、中金堂院や南大門などの発掘調査を継続しておこなっており、本年度は北円堂の南門・回廊の調査をおこないました。調査期間は2011年7月1日～10月11日、調査面積は676㎡です。

北円堂は、藤原不比等の一周忌のため、養老5年(721)に造営された八角円堂で、『興福寺流記』などの文書から、周囲に回廊が巡り、正面に門が開いていたことがわかっています。建立以後、北円堂は永承4年(1049)、治承4年(1180)の2回罹災し、その都度再建されてきましたが、回廊については永承火災後の再建は確認されるものの、治承火災後の再建は明らかにされていません。以後、北円堂自体は数回の修理を受け現在まで残っていますが、回廊は江戸時代半ばには既に存在していなかったことが絵図などから読み取れます。このため、調査では、南門・回廊の遺構を確認することと、治承以後に回廊を再建していたのかどうか焦点となりました。

調査の結果、凝灰岩製の基壇外装(地覆石)や礎石抜取穴を検出し、東面回廊全域と南面回廊の東半分、北面回廊の一部の遺構が残存していることを確認しました。南門より西側は、遺構面の削平が著しく、礎石の痕跡などは確認できませんでしたが、わずかに南門の基壇外装抜取溝を確認し、基壇の規模を推定することができました。検出した遺構を整理すると、回廊全体の規模は、東西150尺(約43m)、

南北147尺(約43.5m)となり、『興福寺流記』に記された北円堂回廊の規模に一致します。南門は柱位置などはわかりませんでしたが、基壇の規模は東西37尺(約10.9m)、南北27尺(約8.1m)と推定できます。

基壇外装を注意深く掘り下げていくと、検出した地覆石の内側に、古い地覆石の抜取溝を確認しました。つまり、検出した地覆石は、造営当初のものではなく、再建後のものだったわけです。石材が凝灰岩であることとあわせると、地覆石は永承火災後に再建されたものと考えられます。更に、この地覆石の内外では、火災によるとみられる焼土面や炭混りの土が広がっていました。地覆石の一部は、この焼土面を掘り込んで抜き取られていました。以上のことをあわせると、回廊は永承火災後に再建され、治承火災によって焼け、その後は再建されていなかった、と考えることができます。

しかし、焼土面や炭混りの土の直上には、治承以後に造られたとされる鎌倉時代の瓦が、回廊の遺構に沿うように捨てられていました。もし治承火災以後に回廊が再建されていなかったとすると、この瓦は一体どこからやってきたのでしょうか? 回廊再建の問題は、今後、出土した大量の瓦の分析を待って検証していく予定です。(都城発掘調査部 大林 潤)



調査区全景(南東から)



東面回廊の凝灰岩製地覆石(北西から)